

前橋文学館報

萩原朔太郎記念

水と緑と詩のまち

No.25 2004.3



「詩と現実、あるいは五つの告白」 四元 康祐

平成十五年十月二十六日に開催された第11回萩原朔太郎賞記念イベントで、受賞された詩人の四元康祐氏による講演が行われました。以下は、この講演録です。

こんにちは、四元です。

今日は、僕は朗読がすごく好きなので、過去に出したこの三冊の詩集を読みながらお話しをしていければと思います。

今回は朔太郎賞ということなんですけれども、僕の覚えている朔太郎の最初の思い出出ているのは高校の時に、文学少年だったんだけれども友達と二人で文化祭で研究発表をやったんですね。でも僕は朔太郎を借りてやりました。だから、そういう十六歳か十七歳だと、もう何か自分が中原中也の代弁者になったみたいで、朔太郎さんというのはあっち側の詩人ということで、ずっとあっち側だと思っていただけども、今度の賞をいただいたこの喋みの午後を書きながら感じたのは、いつのまにか自分が中原中也が死んだ年齢をとくに通り越して、あの人三十歳ぐらいで亡くなったんですね、で、もう四十歳過ぎて、どちらかという朔太郎さんがいた場所に近付いてきているんじゃないかなあなんて。

後でその詩も読みたいんだけど、この中の一つで「パリの中原」っていう詩があるんですね。これは僕が仕事でパリの街を歩いて、で、ちょっと仕事さぼって美術館で絵を見てると中原中也が突然横から話しかけてきて、でも僕は四十過ぎていて生活も安定している会社員で、向こうはまだ二十歳そこそこの金無いやつだから可哀想だなっていうんで著つてやつたり、ちょっと文学談義したりするんだけれど、そういう自分っていうのは明らかにもう中也じゃあないですね。で、その話したりしているっていうのは、あくまで詩の中の話であって、現実の自分は何かしているかっていうと、何か街角でぼうっとしている中年のおっさんで、これはもしかしたら朔太郎さんが後期の散文詩の中で、故郷のこ

とを思いながら神田のピアホールで昼間からビール飲んで呆然としている、あの心境に随分近いんじゃないかなと思って、実はこの賞をいただくもつと前にその散文詩を探して回って結局手に入らなかったんだけど、でも、そんな覚えがありません。

実際のそのさつき略歴(司会者による講師略歴紹介)でありましたように二十六歳の時に日本を離れてからずっとこれまで海外暮らしなので、自分の故郷っていうのが一体どこにあるのか、自分がどこに属しているのか分からないというところも、朔太郎さんの「望郷」とか「ノスタルジア」っていうのとちょっと響きあうのかな、なんて思うのですけれども。

今日の話の題を、とりあえず「詩と現実」っていうふうにいって、普通は「詩」と「現実」ですよね。だけれど、何か僕の場合は「詩」っていうものと、それに対する「現実」っていうものを対比して、「現実」を忘れて「詩」を書きたくないみたいな気持ちがあるかと思ってしまう。いつもその「詩」と「現実」のせめぎ合いみたいなものに興味があります。

それで、まずは最初の詩集なんですけれども、今はもう全然幻の名作で絶版で手に入らない「笑うバグ」っていう本がありましたね。これは谷川(俊太郎)さんがその時、でも、立派な帯の言葉を書いてくださって、そこには「こういう詩が出現することを私は待ち望んでいた。ビジネスの世界に背を向けるのではなく、その只中から生まれ、異なる時、異なる語に取り囲まれながらしぶとく健やかな母語。四元からは冒険し、そして発見する。詩が住み得ないと思われていた荒野にひそむ詩をなんていうごく立派な言葉でいただいたんだけれど、要は後期資本主義社会である現在の社会を構造的に描く、と、端的に言ってビジネスを詩にしたっていう詩集です。

で、その時にビジネスを動かしている「理屈」というか「理論」とか、「システム」とかありますよね、例えば「複式簿記」とかね。「投資回収率」とか一つはそういうそのものを詩にしてみたいですね。例えば「会計」っていう、「会計学」。これは、この詩はちょっと難しいんですよ。それは文学的に難しいんじゃないんで、最低限の商業簿記の知識が無いとよく分からないっていう意味で難しいんだけど、要は「複式簿記」ですから、「借り方」と「貸し方」があつて、「借り方」には「現金勘定」とか「売掛金」、「在庫」、それから「貸し方」のほうには「買掛金」とか「借入金」、それから「資本の部」なんかありますね。それでちゃんと帳尻が合っていないといけないんですよ。

会計

まず眼前に広がる果てしない荒野を想像してみました
次に、君の足元から地平線に向かって一本の直線を引く
見たまえ、これが世界の全体、そしてそれを分割する分水嶺だ
世界に包括されるすべての因子は
この分水嶺を中心として完全なるバランスを保たねばならない
要するに右と左、これが基本だ
さて、左側には君の所有するもの
右側にはその取得に際して発生した債務を配する
例えば、快楽と生殖、美と毒、
いま生きることといつか死ぬこと
一本の若いけやきと失われた記憶
間違つても、混沌などという概念を持ち込んではいけない
世界はいまこそ秩序を獲得しつつあるのだから
このシステムにそくわぬものは地平の彼方に追いやりなさい
たとえそれが君自身であつたとしても

という詩ですね。なるべく忠実に会計学に即して書こうとして、それが途中から詩になってしまふということを目指してやっています。

もう一つ「投資回収率」。これも難しい理論が実はありまして、将来の「キャッシュフロー」を、ある割引率でもって現在価値に戻し、それを現

在の投資金額と比較して、投資金額のほうが将来のキャッシュフローよりも上回つたらこれは赤字だから採算が取れなくて投資回収率はマイナスになつちやつてその事業はやめなきゃいけないとか。そういうね、小難しい理屈を、実は私はこの詩を書いたのは二十六歳でアメリカに行つて、二十八歳から三十歳の二年間アメリカの大学院でビジネススクールに行つたんですね。そのビジネススクールで今かいつまんで言つたみたいな投資回収率だの金融理論だの会計学っていうのを英語で勉強したんですね。で、英語で勉強するのね、日本で簿記とかつていうのを聞くとか何か古臭くて非文学的って思うんだけど、英語でこれ聞いてるとちよつとすごく新鮮で、今の世界のことをもしかしたら文学よりもっと効果的に表現しているんじゃないかなつていうふうな、授業を聞きながらばうつと思つてしまつたんですね。

これは立つて読みますね。

投資回収率

未来のすべてを現在の波打際に引き寄せること

そこで初めて比較することが可能となる

現在の事象と未来の事象とは等価ではないのだから

明日の快楽は今日の太陽の下で揺れる陽炎

では膝まついて、押し寄せる波に手を差し伸べなさい



そのしなやかな指先で明日を選択するのだ
遍在するあなたが最も満ち足りるように
快樂曲線のスロープに身を委ね

いつまでもいつまでもそうしてなさい

こういうその、ビジネスのね、理論そのものを一つには詩にしていくな
つかは書きましたね。ほかにも「オプション取引」ですとか「負債の証券化
について」ですとか「企業年金会計」ですとか書いています。

でももう一つはね、そういう私たちの社会を律している企業活動とか、
あるいはその企業活動をさらにまた律しているこういう理論と、ほとん
ど無関係に、その周辺で生きている人たちがっているんですね。真ん中で、
僕なんかその一人だけれども、ネクタイ締めている人ではなくて。そ
ういう人に成りきって語るという、そういう詩の中には入っている
んです。

掃除婦

「床に掃除機かけてゴミ箱に「ゴミ袋かけ代えてからね
天井の照明全部消すでしよ」

そのときが一番好きなのよわたしは

コンピュータの画面がほうつと浮かび上がって

フロアによって画面の色は違うんだけど

黒地にオレンジのが一番いいね 鬼火みたいで

それでもって窓の外は百万弗の夜票よ

耍な話だと田舎の星空想い出しちゃう

それでザマアミ口って気持ちになる

田舎のじつちゃんばあちゃんも

昼間ここでネクタイ締めて働いてる連中も

世間一般に対してザマアミ口って

あたしちよつと変わってるから」

今度もやっぱり掃除のおばさんと同じで、人がいなくなつた後に出て
くるガードマンの詩です。

「幽霊が出るってんだよね

バソコつてスピーカーついてんでしょ 小さな

あそこから女の泣き声が聞こえるんだって 残業してると

オレ、任天堂の「ゴーストバスターズ」ゴゴして捕まえちゃえば

なんか云つたんだけど おおマジだもんみんな

まあ、バグつて云うのはあるんだよね コンピューター・バグ

あ、オレ、バソコやつてつから自分でも

バグはどこからか忍び込んでシステムのなかをさ迷い歩く

そうやってシステムを壊してくわけ

おまけに他のシステムにまで伝染してゆく エイスみたい

それで幽霊だけどさ オレはそのバグだと思ふんだよね

だいたい泣いてるだけの幽霊なんか怖くないじゃん

バグのほうが全然恐ろしい

オレ夜眠る前、バグになつた自分を夢みる」

これもまたね、続けて窓際族の人とか、「悲しみの友証券アナリスト」
「部長と円盤」とか、いろいろそういう人が出てきますね。「タイピスト」
とか。要はそういうシステムとか法則みたいなものと、それからその回
りでうごめいている人たちと、これを平行して書くことで、何か全体み
たいなもの表せないかなと、若いながらに考えたのではないかと思
います。

もう一つ当時考えていたのは、こういうビジネスとかっていう世界を
詩にした人はそれまでいなかったですね。詩っていうとどうしても「詩的」
というか「文学的」というか、そういうものであつて。で、僕はそういう
の好きでは読んでいたんだけど自分が書くとなると何か恥ずかしいん
ですわ。非常に限られた文学の友には見せられても、親に読まれるとも
う恥ずかしいとか、世間一般になかなか通用しないみたいところがあ
つて、それをなんとかしたいなっていうんで、詩から一番遠いものをい
かに詩の中に取り込むかというのを当時から考えていたような気がし
ます。

それで、この詩集が出た後で、小説家の高橋源一郎っていう人が新聞

に批評を書いてくださったって、こんなふうに言ってくれました。「この詩にはぼくたちも登場している。だが、ぼくたちは自分がこの詩に登場していることを知らない。なぜなら、ぼくたちは複雑なシステムの一部として登場していて、しかもそれがどういうシステムなのかぼくたちにもわからないからだ。かれは、それをはじめてことばに変えた。(中略)流動する世界の中で自分の位置を確かめるために、かれは高い場所から、俯瞰するように詩を書く。かつて、父の世代がそうやって詩を書きはじめてきたように。」で、その後で田村隆一さんの詩句を引用しています。「俺は垂直の人間。俺は水平の人間にとどまるわけにはいかない。それを讀んだとき非常にびっくりして、全体を書きたいつていうところはそのまま自分の思ったとおりなんだけれども、「垂直的」とか「高み」つていう意識はあまり無かったんですね。どちらかというとこれまで誰もやったことのないことをやっているよ、とか、誰も行ったことの無い所に行つてやろうというんで、僕自身としてはコンプスが新大陸を発見するみたいな、水平的なつもりでいて、自分にそういう垂直性が欠けているつていうのは密かなコンプレックスだったので、そこに田村隆一さんのような本当に垂直的な詩人を引き合いに出してきたつていうのは、びっくりしましたね。

ところが、これも後で読む「喋みの午後」というところまで行くと、行くつていかまあ自分がそれだけの歳をとつて三十代を経て四十代の半ばで書いた詩というのは、非常に垂直的な所に行つてしまつたと。その過程をもう少し辿りたいと思います。

僕の話の題、先ほど「詩と現実」つて言いましたけれど、「あるいは五つの告白」とつて、五つこれまで誰にも話したことのない告白をしようかになつて二十七歳ぐらゐから旺盛に詩を書き始めたんですね。それは六つと自分では日本を離れて日本語が恋しくて詩を書いたのかなと思つていたんだけれど、最近ちよつと違うんじゃないかと思つて、むしろ秘密はちよつとその頃ワープロつていうものが出回つて、それまで鉛筆で、肉筆で書いていた詩をワープロで書き始めた。僕はその時すこく書きやすくなつたんですね。自分の肉筆を見ないでいきなり活字で見る、と。これがね、実は自分が詩を書き始めた理由じゃないかと思つてますね。書くことが出来るようになった。

で、今でも詩つていうのは基本的に僕は活字にならないと全然判断出来ない。あるいは書いていても快楽がないんですね。それはどういふことかつて言うと、自分を見るのがあまり好きではなくて自分を消そう消そうつてするよな、自分がいなくなつて、何か対象に没入するよなね、書き方をしているんじゃないかと思つてます。

そこで今度は二冊目の詩集「世界中年会議」つていう、これもちよつとふざけたタイトルでね、世界中の中年が一堂に会して、世界会議を行うと。非常に地味な装丁なんだけど、これは世界中年会議を開いている学会の会報つていうか、学会誌つていうことで、ちゃんと学会のロゴもここにありますし、英語で、なんたつて世界会議ですから、「The World Congress of Middle-Aged」とかつていうものもある、まあそういうあれなんですけれども、三部構成になつていまして、アメリカに住んでいた時代にアメリカの生活そのものを主題にした詩と、三十代の頭に子供が生まれて、その子育てをアメリカからドイツに引越すあたりでやつていたんですけれど、その子育ての詩ね。最後は中年の詩と。書かれた期間が三十代の頭から終わりの十年ぐらゐにかけて書かれた詩です。

まず、アメリカの詩を読んでみましょう。これは、ニューヨークの地下鉄の詩です。このころ僕は仕事でワールドトレードセンターにフィラデルフィアから通つていて、あそこまで地下鉄で行つていました。だから、この詩が書かれた時は当然あれはまだ建つていて、自分はすこい地下にいるんだけれど頭の上にはものすこい高いものがそびえ立っている。それで、かつ、もう一つは今と違つて当時は非常に治安が悪かつたんですね、あの辺りね。地下鉄の駅からワールドトレードセンターの入り口の上の時に、僕なんてどこから見てど真面目な日本のサラリーマンだつていふのが分かるのに、「麻薬はいらないか」とかなんとかつて売りにくる人がたくさんいて、追い払うのが大変だったのだけれど、そういう時代の「ニューヨーク サブウェイライド」、ニューヨークの地下鉄という詩です。

ニューヨーク サブウェイライド

至るところ蒸せ返る小便と汗の匂いに
舌応なく鼻孔と肺と脳とを犯されながら

時間を訊かれるたびに筒え頭筋を強張らせ

眼の前で若い娘がホームから突き落とされるのを見て
その視線をゆつくりとタブロイドの活字に戻す

いけにえを捧げるべきどんな神が
いると云うのかこの地底の祭壇に

史上最高の富と文明が

密林に勝る混沌と恐怖の上に成り立っていて

白い人は白い膚を呪い

老人は衰えた脚力を呪い

女たちは突き出た乳房と尻に恥じ入って

垂れかかる葉と蔓のように車両を充たす

その呪いと恥の間を黒い若者がしなやかに歩いてゆく

禁欲と勤勉で地上を律する膨大な法の体系も

悪意がないと云うただそれだけのことを

乗客たちに示す手立てを若者には与え得ないから

彼もまた黒い膚を呪い盛り上がった筋肉に恥じ入って

列車は耳を弄するきしみをあげてカーブを曲がり

その一瞬人々は遙か頭上に広がる善の夜空を

かけがえのない恩寵のように思い浮かべる

もう一つ当時のアメリカ、これは今でもそうだと思いますけれども、

テレビで新興宗教の神父さんが説教をして、会場に人がばあーんとして、

寄付を募ると、画面の下に電話番号が出て、フリーターダイヤル

で、テレビでどどん寄付すると。クレジットカード受け付けますなん

ていうのが出て、それで大金をかき集めては大体税金とか払っていきな

くて、かといって宗教法人でもなくて、何か怪しくて事件を起こすっての

が随分はやっていました。多分今でもやっているんじゃないかと思うん

だけれども、すごくアメリカ的な光景だなと思って。それを題材にした

「電子の波に乗る神々」

電子の波に乗る神々

テレビの前に聖書を持って座って

神さまに頭のなかを触られるのを待つてた

本当はルイジアナの会場にいたのだけど

ルイジアナは遠いのでかわりにテレビで見るのだ

画面のなかでは牧師さんがお説教をいって

わたしは朗読や説教は好きじゃないけど

奇跡を見るのは好き

車椅子のひとがバネ仕掛の人形のように立ち上がり

泣きながら跳びはねるみたいにしてステージまで行って

牧師さんのびかびかする衣装の下にひれ伏して

そしたらお母さんも手で額をおさえて

身体をぐらぐら揺らしながら立ち上がり

眼をきつくつむって大きな声で

「主がわたしに触った」と云つたら

屋根の上の野良猫がアンテナを倒して画面が消えて

お母さんはそのままびくりともしなくなつた

きつと神さまに頭のなかを

触りつつけられているのだ

わたしはお母さんがそのまま神さまのところへゆくと想つて

恐くつて泣きながらお母さんと呼ばんだ

お母さんお母さんはやく帰つてきて

神さまお願い

電波に乗ってルイジアナまで帰つてちょうだい

もう一つアメリカの詩を読もうかな。これは移民問題っていうか、今

はもつともつとひどくなっているかもしれないけれど、当時からメキシ

コに住んでいる人たちが、川か何かを夜の間にくぐり抜けて、アメリカ

の国境の向こうに勝手に入ってくる。そういうのが社会問題になつて

いて、それを書いたものです。この中に一つテレビのクイズ番組って

いうのが出てくるんですけど、これは「ウィルオブフォーチュン」、「幸運

の輪」っていう人気テレビ番組で、今でもやっているかどうか知らないで

すけれど、長く長く毎晩六時半になったら必ず七時までやるみたいなや

つて、すごくアメリカ的なんです。要するに他愛もないクロスワード

パズルみたいなものをちよつとやって、どんとどんとどんお金に加算されていって、何万ドルもの賞金や賞品を持ち帰れるっていう、金びかみたいなの、で、金髪のきれいな女の子がショーのホステス役をやるみたいな、そういうテレビ番組が出てきますので、一応これも参考知識として。

南から

亭主いなくなつた

亭主ロス・エスタードス・ウニードス行つた

河こえて行つたか

トンネルぬけて行つたか

ノオ、ノオ、セニョール

亭主テレビジョンなから入つてつた

お金ぜんぶ抱えて入つてつた

そのときテレビ、クイズやつてた

ロス・エスタードス・ウニードスのクイズショー

亭主の組み立てた冷蔵庫

マリアさまより眩しく光つてた

その横でドルの輪まわつてた

カーニバルの当てものみたいにくるぐるぐるぐる回つてた

亭主そのなか吸い込まれた

シイ、シイ、セニョール

亭主からだ透きとおつて

骸骨なつてこつち振りかえつた

笑つてたか泣いてたかわたし知らない

豆煮えたぞ

セニョール食べるか

亭主いなくなつた

あの、「ロス・エスタードス・ウニードス」っていうのはスペイン語で「The United States」、アメリカのことですね。

このころ僕は「何か、アメリカのニュース番組とか、「タイム」とか「ニ

ューズウィーク」とか「ニューヨークタイムズ」みたいな、いわゆるジャーナリズムみたいなものにすこく憧れて、自分は詩という形で世の中の複雑な現象とか、出来事を表現するジャーナリスト詩人になりたいなんて思っていましたね。それで、ここでも最初の話とちよつと関わるんだけど、この世にある森羅万象はすべて詩の題材になりうるみたいなのふうに思っていて、あるいはそれを証明したいっていう気持ちがあつて、当時の、だから僕の憧れていたのは詩人ではなくてテッド・コッペルっていうアメリカのABCテレビ局の人気テレビキャスターでした。その人は非常に知的なニュースキヤスターで、どんな複雑なことも非常に明快に言葉で裁いてみせる。別に解決するわけではなくて、その問題の本質を取り出して矛盾する点があればそれを矛盾として提示する、対立点是对立点としてよく対立させていくっていうような形でトークショー形式で盛り立てていくんだけれども、多分何かそういう詩の書き方をしてるんじゃないかと思ひます。

ここで第二の告白して書いてあるんだけれど、何だっけな、それは？あの、いろんな詩の書き方があると思うんですけど、僕は今言つたみたいな話です。それから、道歩いていて靈感に打たれてささささと詩を書くっていうようなことはあまりしないですね。いつも連作で書きます。さっきのだったらアメリカっていうテーマを定めるとそのテーマの回りをぐるぐる巡るようになってだあーつと書いていくんですね。のつてくると一日一編ずつぐらい、一ヶ月ぐらい書くんですよ。で、四十編とか五十編ぐらい書くと、なぜそうするのかっていうのは自分でもよく分からないんだけど、そういうやり方が好きなんです。

一つにはおそらく、世の中、現実っていうのはすこく複雑なもので、詩っていうと何かそれを一言で言い切る傾向にあるけれども、現実はそのんなにきれいな事、一言で割り切れない。でも、詩を書きたいっていう時に複雑なものをいろいろな角度から、多面的にモザイクを作るみたいになつていくと何か迫れるんじゃないかなというのがあると思いますね。

だけでももう一つ最近になつて気付き始めたのは、実はもしかしたら僕はテーマを決めて書いているけれど、本当はテーマ自身にそんなに興味はないんじゃないかっていうふうにも思ひます。というのは、こういう連作をしていて、ある程度すべて書ききつて、もう書くものがないなど

赤ん坊が初めて笑った
光線すらを振り曲げる巨きな力が
漲り溢れている夜空の下で
その一瞬、肉眼には辿れない微細な回路が繋がったのだ

まあ上の息子が初めて笑った時の詩ですね。

それから、ちよつとこれもおセンチなんですけれども「宇宙の出来事」。

宇宙の出来事

レエスのカーテンが微風に翻る窓のそばで
寝台の上の赤ん坊が生まれて初めて
寝返りをうつた

たつたそれだけのことだったのに
何故あなたは泣いたの？

アイロンをかけたばかりのハンカチを握りしめ
オルゴールの鳴る部屋の隅っこで

昨日とおんなじ空の下
くるくると回転する地球の上
死滅してゆく夥しい星々に囲まれながら

今のはお母さんだと思えますけれど、今度はそのお母さんがしゃべっている詩です。

これもちよつと予備知識。「DNAカレンダー」という詩なんですけれども、「DNA」というのは「遺伝子」ですね。で、今も論争しているけれど、人間は生まれつきすべて決まっているのか、つまり遺伝子がすべて支配しているのか、それとも遺伝子とはあくまで一部しか決定出来なくて、環境が決めるのか、ひどい極端な話になると、いやもうその羅る病気が死ぬ、事故は別としてね、死ぬ病気から、すべて遺伝子の中に決まっているんだみたいな、究極的運命論者みたいな人もいるみたいで



思った時に、拍子で出てきたものがすこく自分にとって変なもので、新しく力を持っていないおもしろくて、そういうものがぼーんと最後に出てきたらまた前に進めるみたいなどころがあるんですね。そのぼーんと出てくるものについていうのは、しがつて頭で考えて書けるようなものでなくて、何かそういうものを全部取っ払った後に最後に仕方なく押し出されてきた、多分意識の非常に深いところにあるものかなと思って。そして、その、優れた詩人はきつとそんな長い長い段階を踏まなくて一瞬にしてそこまで降りていって詩が書けるんだらうけれども、私はそうはいかなくて、きつとそこに辿り降りていくための長い助走として、連作で何十編か書いているんじゃないかなという気も最近はしてきました。

それで次に子育ての詩を読もうと思うんですけど、このころはちよつと三十歳の時に上の子が生まれて、上の子が生まれる直前にフィラデルフィアからシカゴの郊外に引っ越ししたんですね。で、シカゴってというのは素晴らしい街だけれども、シカゴの郊外っていうとくせ者で、これはもう真つ平らの、山も何も無い、しかも文化的なものが全然ない、マンドリンクラブなんて決していないようなね、本当に建て売り住宅と広大なショッピングモールだけのところですね。で、勿論非常にすべて機械的でスーパーマーケットは大きいのは二十四時間やっているし、お金使ったり稼いだりするにはいいのだからうけれど、ちよつと味気ないところでもある。冬はそれでもものすこく寒くなるし。そういうところに移つたばかりで、しかも赤ん坊を育てていると、何か自分がちよつと月面にいるんじゃないか、みたいに思つた記憶があります。

ええと、最初に短い詩、「回路」。回路っていうのは電気の回路ですね。

すけれども。

DNAカレンダー

むつりしたセンセイが予言した丁度その日にこの子は生まれ
育児書に書いてある通りの仕草でわたしの指を握って
はじめての笑顔も歯の生え初めも突発性発疹も全部予定通りで
すがり立ちだけがほんの少し余所の子よりも早かった
律儀な奴だよ、ってわたし達は笑ったし
ほかの子と全然違っていたらきつと怖くはなかっただろうけど
科学だとか経験とかに見透かされるのもなんだか痛た
一生懸命ここまでやって来たんだもの
壁に映る木漏れ日をおんなに夢中で見つめるんだもの
DNAなんかから自由に育ててあげたい
たとえ青文や小指のかたちがミリミクロンすら変えられなくても
気質や異性の相性や確りやすい病気までが決まっただけでも
明日そのながい睫毛を揺らす微風や
初めてキスをする女の子の視線や
いつか死ぬとき空に聴く物音は
あなただけへの贈物
きつく睨つたわたしの顔の裏で星が爆発したあの瞬間から
毎日誰かの大きな手でめくられる書き込みだらけのカレンダーの
宝石のような小さな余白

で、これまでお気付きになったかどうか、読んできた詩の中で、生身の私ってというのは一度も出てこないんですよ。今もお母さんだったし。それがちょっと次の詩は変わったのかなと思うんですけどね。これも一つ事前においたほうがいいと思います。タイトルが「SIDS」(シズ)ってやつで、今、最近では日本の新聞にもよく出ていますけれども、なんて言うんだろう、突発性乳児突然死病とかっていうのかな、とにかく俯せ死みたいなきらんで赤ちゃんが突然意味もなく死んでしまうっていう、あれアメリカやイギリスでは「シズ」っていうふうな略称で呼ぶんですね。その「SIDS」っていうのがタイトルです。

これもじゃあ立って

SIDS

生きて知るのには
ゴヤのファーストネームばかりではない
新生児の千人に四人までもが
眠ったまま息と鼓動を止めてしま
前触れもなければ理由も分からないので
未然にそれを防ぐ手立てはなにもないのだと
どういう見かともあるように育児書に書かれていて
長く寝てくれ途中で起きるなど念じていた俺は
怖じ気づいて子供の様子を調べに行くこと
うつぶせの身体はびくとも動かさず
指先で胸をついたら子供はおもむろに顔をひねって
ついでに笛の音のようなおならまでした
こいつの生命を奪うのはたやすいがかと云って
大の大人を殺すのが難しいわけでもない
理由があるうとなかろうと生は間断なく死へと連なっていて
取りあえずこのままこいつは眼を醒まし
またなにか新しいことを学ぶだろう
SIDSが Sudden Infant Death Syndrome の略であることを
今日生きて俺は知った

で、この「俺」っていうのは果たして生身の現実の私なのか、これもまたその前の詩で僕が若い母親になってみたり、掃除夫になってみたりしたように、ただの演技で子育てにとまどう若い父親っていうのを演じているだけなのか、自分でもちょっとよく分からないんだけど、ただ、何かその距離が、つまり書くものと自分との距離っていうのが、これを書いた時にちょっと縮まったのになんかという気がしました。

それで、さっき言いましたように、子供たちを育てていた時代は、イリノイ州の北の一番高い山が標高二百メートルだとかっていうようなところで、寒さに閉じこめられて、しかも究極の核家族みたいなところ

ありますでしよう。海外駐在をしていてね、回りに親戚とかないし、お母さんや、親戚が子供ちょっと面倒見てくれるっていうのもないから、ちよつと鬱々としていたところがきつとあるんじゃないかと思うんだけれども、そういう環境が人をして、その、内面に向かわせるみたいなのとももしかしたらあつたのかもしれないですね。

そしていよいよですね、中年に入っていくわけですね。このころアメリカから今度はドイツに移つて、ドイツっていうのは文化的で、ビールもうまいし、いいところなんです、だけれども、ミュンヘンですけれど、いかにせん今度は言葉も分からないしね。最初からまた全部出直して、結構大変だったんですけれども、それ以上に自分がだんだん、このころ三十代の半ばであらためてね、人間っていうのは老いてやがて死ぬんだということが、実感されるような時期ですね。

で、そんなことを考えていたのを覚えていますけれども、これ自分でも好きな詩なんです。

行つてきまあす！

朝幼稚園へ行つた息子が

夜三十五歳になつて帰つて来た
やあ遅かつたなと声をかけると

懐かしそうに壁の鳩時計を見上げながら
大人の声で息子はうんと答えた

今まで何していたのと妻が訊けば

息子は見覚えのある笑顔ではにかんで
結婚して三年子供はなくて仕事は宇宙建築技師

俺もこんな風に自分の人生を要約して語つたっけ
おや、こいつ若しらがだ

自分と同一年の息子から酒をつがれるのは照れるもので
俺は思わず「お、どつともと云つてしまふ」

妻がしげしげと息子と俺の顔を見比べている

だがそれから息子が三十年後の地上の様子を話し始めると

俺たち夫婦は驚愕する

よくもまあそんな酷い世界で生き延びてきたものだ
環境破壊、人口爆発、核、民族主義にテロリズム

火種は今でもそこいらじゅうに満ち溢れていて
ええつとその今が取り返しつかぬ過去となつた未来が息子たち
の今であつて

ややつこしいが最悪のシナリオが現実となつたことは確かだ
あのう、駄目なのかな、これからパパやママが努力しても？
さあて、どうだろう、時間の不可逆性つてものがあからねえ
妻は狂言の場面みたいに息子の袖を掴んで

ここに残つて暮らすよう涙ながらに説得するが
それはやつぱり摂理に反するだろう

未来はひとえに俺たちの不徳のなすところなのに
息子は妙に寛大だ

既にその世界から俺が消え去っているからだろうとか
聞いてみたい気がしないでもないけど

まあどつちでもいいや

「僕らは大丈夫だよ、運が良かったら月面移住の抽選に当たるか
も知れないし」

息子はどつこらしよと腰に手をあてて立ち上がり

俺と握手をし妻の頬に外国人のような仕草で口づけをし
それから真夜中の闇を背に玄関で振りかえると

行つて来まあすと五歳の声をあげた

だんだん自分が出てきちゃつて、次は「記録映画」という詩です。

記録映画

夫婦喧嘩のあとでむつつりと黙っている

背後でかすかな声が聞こえる

振り返っても壁しかないが

一昨年死んだジイさんのだみ声に間違いない

「わしはアキコさんに理があると思う」

「あの人にとって他者とは何だったんだろうねえ」

そつ続けるのはなんと俺の息子だ

「ひよつとしてみんな自分の分身だったのかも」

聞き覚えのある誰かれの声

生者死者の区別なく入り交じって

どうやら俺の一挙一動を鑑賞しながら

批評を加えているらしい

「鯨の親子が別れるクダリでいつも泣いてたわ」と死んだ母親が

言う

「カニエキスを食べられたらねえ」とその後妻

「お前はまた関係のないことを喋る」親父が怒る

「一人息子、O型、寄宿舎生活、もはや戦後ではない、……」あ

いつまた分析してる

なるほどなあ、ひとりきりでいたつもりの時にも

こうしてみんなに見られていたんだ

恥ずかしさやうつとうしさは感じずに

むしろ懐かしさがこみあげる

あのう、本人の口から一言言わせて貰うとですわねえ

俺の不貞腐れた顔がスクリーン一杯に映し出された小部屋に

そつと入って照れながら切りだすと

暗がりから厳しい視線が振り向いて俺の参加を拒絶した

この「アキコさん」というのは私の妻の名前で、だんだん私小説的になってきているのだけれど、一人きりでいた時もこうしてみんなに見られて

いたんだなあというのを、さっきまで話していたことにちよつと絡めて、今読みながら突然思ったんですけれども、この詩を書いた時は全く意識していないかったけど、もしかしたらそれまで書いていた詩の中で全然自分がいないようなふりして、人に託して書いていた中に本当は自分が滲み出た、ということを既にこの時感じつつあったのかもしれないね。最後にね、この詩集の中から「峠越え」

峠越え

なだらかな斜面に横一列に並んで

僕は峠越えに出かけた

TV画面の奥底から湧き上がる拍手を聞き流し

やわらかな四月の陽差しを浴びて

それはもう何十年も昔のこと

まだ誰も女を知らなかった

夕立のあとで濡れて輝く果実や

朝もやのなかで鋭く匂う樹木となら体験してたが

時々崖つぶちから奈落の底を覗き込んだり

足滑らして妙に昂つたりしながら

僕らはなおも歩いている

驚くべきことに未だひとりの脱落者も出さないで

だが風のなかに微かな秋の気配はする

横一列はだらしなく崩れ

手をつなごうにもそれぞれに手一杯

頂きはもう通り過ぎたのかさうとは気がこないまま

死んだ父母らが真っ白な積乱雲となつて湧き上がり

無愛想にこつちを覗き込んでいる

その向こうのさらに巨大な影へ向かつて

僕は峠越えを続行した

これで第二作目を終えたいと思いますけれど、ここで第三の告白です。今回文学館の方にもお見せして、持ってきたんですけども、僕は写真が大好きなんです。写真が好きなんです、きつとピデオも好きだろうと思つて、まあ実際ピデオも撮りたいなあと思ひましてね、ピデオを買ったけれども何故かピデオはうまくいい作品が撮れないんです。これはちよつとさっきのワープロと肉筆みたいなところがあつて、写真というのは一瞬の中に自分をばーつと消して、その一瞬、きれいな一瞬だけが後に残つて、そこには自分の影が全く跡形もなく無くなります。ところがピデオっていうのは長いし動きますから、で、その動かすつていうのが自分だから、ピデオを見てるとその動かしている自分を実は見ている自分ですね。どうやらそれがピデオを買つても結局使わなくなつてしまう理由かなと思つて。

だから、さっきから何か一貫して詩人の中における自分っていうような話をしているんじゃないかっていう気がするんですけども、もう一つそれに加えて言うと、このころいう詩を僕は書いていたんですけど、この中年シリーズみたいなものを書いて、自分でいうものに近付けば近付くほど小説を書きたくなつてきたんです。それで、詩を書いている時から何かちよつと小説みたいにかつていうのはよく言われていたし、あるいはそれは小説で詩じやないとかつていうふうに言われることもあるし。

僕子供の時から詩は読むのはそんなに好きじゃなかったんですけど、小説は読むの大好きだったですから、いつか自分は小説を書く人になるんじゃないかなんて子供の時に思つていて、書いたら絶対書けるだろうと思つて書くのだけれども、何故か書けないんです。その書けないっていうのは無理矢理強引に最後まで書こうと思つたら書けるんですけど、大体書いている最中でつまらなくなつてきて、それでもやり遂げたことは最後までやんなきゃいかんっていうのはあるからやつていると、読み返してみるとやつぱり面白くない。で、この間石川啄木っていう人の日記だかなんか読んでいたら、その啄木さんが余は小説を書きたかった。いや、実際に書いた。だが、どうしても書けなかった。そこで余は夫婦げんかで妻に負かされた夫が子供を叱りつけることで憂さを晴らすかのように短歌を書いた。って書いてあつて、あ、もしかしたら僕が詩を書いているのはそうやつて書いているのかなつて思ひました。小説が書

けなくて、それでちよつと詩を書いてみたいなことを一時やつていて、その間詩と結果として遠ざかつていた、詩を書けなかった。それから発表するなんていうことも気が進まなくて、原稿はたくさんありましたが、それを本にしようつていう気持ちにならなくて、店ざらしに置いていた数年間あります。

その間、小説ちよつとどうもいかなつていうんで、よく日記を書きましたね、僕はね。それから美術館に、何かセラピーで通うみたいな感じで、暇があつたら美術館に行つてすうつと絵の前に行つて、で、そのころ何を考へていたのか、よく今となつては思い出せないので、中年の人生の黄昏を感じながら、これからここに行くんだらうなみたいな感慨に耽つていたんじゃないかと思うんですけれど。

で、今日もここに来てくれているけれど、私の友人の榎木信明(とちぎのふあき)っていう人がその一年間アイルランドにサヴァティカル、研究で一年滞在していて、ミュンヘンとアイルランド、そんなに近くはないですけど、日本よりは近いから僕は度々彼の所に遊びに行きました。そうすると手料理で小さなアパートの一室でもてなしてくれるんですけども、そこへ行くときと久しく遠ざかつていた古今東西の詩の、名作の詩集の数々があつたり、非常に日常生活に今日はこういう詩人と会つてきたよとか、非常にうらやましい生活をしていて、自分はほとんどそういうところから遠く離れてきているなあなんていう寂しい気持ちもあつたんだけれども、でもそこにあるから、ちよつとその本をまた手に取つてみたけれど、それで学生のころは全然読みもしなかったエリオットとか、オーデンとか、アイルランドの詩人たちとか、それからもつと古典のダンテとか。いったん何かもう自分は詩を書いたりしないんじゃないかなと思つた目で、もう一回それを読んでみると、文学とつていうのはちよつと別の次元ですくよく分かつていうか、自分と同じように故郷を離れて、人生の真つ盛りとは言いながら先もだんだん見えてきて、でも全然落ち着いていなくて暗中模索みたいな中で、どこかに辿り着こうとして書いている書き手の姿っていうか、顔つていうか、肌触りみたいなものがすくよくよく分かつたんです。で、その時榎木氏は、アイルランドの現代詩の本を書いていて、その中の一つにアイルランドつていうのは詩人の顔の見えやすい国だつて、実際詩人たちが生身で現れて、社会の中でね、機能しているみたいなどころがあるみたいで

す。

それで、翻って日本だと、詩集はすくく多いんだけど、あまり詩人という人の顔に触れることが無かったり、要するに詩はちよつと活字だけになっていて、その生きている人の肌触りっていうのが希薄になっていると思うんだけど、それはちょうど自分が思いがけずダンテやエリオットやあるいはずつと見続けていた画家たちの絵の中に感じられたっていうもの以前の、人間の生きている姿勢みたいな肌触りに触れたっていうのとすくく響きあって、何か分かったような気持ちになったし、で、もう一回詩を書いてみようかなっていう気になって、そこから書き始めたんですね。

それがこの「蝶々の午後」の中に最終的に入ってきた詩です。で、この詩集の中に入っている詩っていうのは冒頭にも申しましたように、私とおぼしき中年の日本人が海外のいろいろなところで歩いてると古今東西の芸術家、まあ専ら詩人と画家が、ぬつと現れてきて、話をするとか、何かそういうのが多いですね、これは。で、先ほど司(修)先生が非常に海外の題材が目立っていたということなんですけれど、私の場合はそれは非常に明解でして、私はなるべく活字だけの詩ではなくて、生々しい詩が書きたかったので、その自分の生々しい生きている普通の現実生活っていうのを絶対に隠さないで、むしろ前面に押し出して書きたっていうのはすくくあったんですね。で、僕はたまたま今、っていうか二十年前からずつと日本を離れて海外に住んでいますので、ちよつとこの中でそのパリがどうしたとか、マドリッドがどうしたって出てくるんですけど、実は僕にとつてはそれは非常に日常的な場所として出しているんです。だからもしも私が東京や日本にいて、会社員生活をやりながら詩を書いていたら、そういうものを出す変わりに新宿とか心齋橋だとかそういうものを出したと思うんですけども。

最初にちよつと書いた「パリの中原」っていうのを読みます。

パリの中原

ルーブル美術館の、薄暗い階段の踊り場で、おかま囀に黒マント

を纏った、子供ほどの背丈の男に呼びとめられた。

「僕、中原中也って云うんだ。おじさん、君の名は？」

ちよつと歩かないか。お互いの人生観を語り合おうじゃないか

半世紀以上も前に死んだ男が

人生観を語るというのも妙なもんだが

とにかく私たちは連れ立ってガラス張りのピラミッドを出た三十年しか生きなかつた中原にとつて

四十半ばの自分がおじさんと見えるのは自然なのだろう

夕闇迫るセーヌの河畔を、サンジエルマンの方へ向かつた

ミレニアムを飾つた大観覧車は

二十一世紀になつて取り外されていた

小柄な私の、それでも肩の辺りにしか届かない中原は

時々小走りになりながら

けれど堂々と胸を張つてついでくる

「君はダダイストを名乗っていたが

それは全てを否定し破壊するということよりも

意識の層を掘り起こし、叙情を深める効果を担っていたから

むしろシュールレアリスムと呼ぶべきではなかつたかな」

大通りに面したカフェに座つて

文学談義に水を向ける

中原は上目遣いに私を見つめて、薄ら笑いを浮かべるばかり

客たちの出入りするたびに

キョロキョロと落ち着きがないのは

別れた女の面影でも捜し求めているのだろうか

それからまた歩いてソルボンヌの近くの本屋へ入つた

中原はその短い生涯を通して、仏語を勉強し続けた人であつた

フランス近代詩の翻訳も多く

外務書記生となつて渡仏を夢見たこともあつたが、それは叶わな

かつた

生前の入手は難しかったのだろう、中原は詩書の類を買い漁つた

さっきの飲み代も、その本の金も私が払った。私は気にしなかつたし、中原も

それが当然だと思っているようだった。生きてゐる者が死者にしてやれることなどたかがしれてる

エリオットとヒューズの詩集の仏語訳を私は中原にプレゼントした

「英米の詩に読むべきものなし」なんて君はどこかで書いていたよっただけだ、

「意外捨てたもんじゃないかも知れないぜ」

腹が減ったという中原を

シテ島の路地奥にある小奇麗なビストロへ連れて行った
中原は上機嫌でフオアグラやエスカルゴに舌鼓を打ち

ポルドー片手にランポーを暗誦したりもした

私は去年訪れたコロラドの山脈の上に横たわる砂漠や

ユカタン半島で出会ったインディオの母子

トスカーナの猪料理やスペインの巡礼について語った
中原が死んだ年齢を過ぎてから私が生きて知ったことから

分かち合おうと思つた

刺繍のあるテブルクロスに片肘ついて

コニヤックに切り替えた中原が
低いしゃがれた声で歌っている

「ポーヨー、ポーヨー」は茫洋の意味か
そこへ私のVISAカードが銀の皿に載つて戻ってくる

ボンビドーは夜十時まで開いているので

ピカソを中心に二十世紀後半の歩みでも辿ること
メトロに乗ったが中原は急速に薄れていって

窓に映る乗客たちの影と区別がつかなくなつてしまつた

ピガールの駅についた時、耳元で

「ちよつと僕、遊んでみます。それじゃあまた」
又メツとした声が聞こえた

「ダダさん、ちよつと待って」呼びかけたけれど返事はなかつた

地下鉄の中には肩からアコーディオンをかけた初老の男が
観光客相手に汚れちまつた悲しい曲を奏でていた

これが「パリの中原」っていう詩なんですね。

この「喋みの午後」っていうのは、ちよつと変わった題名だということ
で、実は最初やはり小説を書いていて、その小説のタイトルだったんで

すね。で、その後で、今度それを日記小説にも書いて、まあいろんな
ことを僕はやってゐるんですけれども、で、「喋みの午後」っていうのは

じゃあなんだって言うのと、
「喋み」っていうのは要するに

「沈黙」の午後と。で、先ほど
その友人がアイルランドで詩

人が見えるってなことを言つ
たり、僕はその詩を読んでそ

の中に何か感じるなつてなこ
とを自分なりに感じて、で、

その一方でドイツですつと暮
らして日記とか書いていたな

んで言いましたけども、その
ドイツでの暮らしっていうのは

非常に精神性に充ちてゐる
っていうか、自分の目を中心に

向かわせるようなところが多
いんです。その一つはね、土

曜日の十二時ぐらいになると
教会の鐘が鳴つてお店が全部

閉まるんです。で、次に開く
のは月曜日の朝の八時まで、

ガソリンスタンドだけは例外



でやっていますけれども、あと飲食店とね。だけどお店っていうのは全部閉まっちゃう。だからアメリカで二十四時間ショッピングモールが開いている生活に慣れている僕としては最初非常にとまどいましたけれども。要するにやるのが何にも無くなっちゃって。でもしばらく経つてくると、店が閉じていてやるのがないというのは何かすこいまずいんじゃないかっていうふうに反省しますよね。そのうちしばらくたつてくると何とか自分で、お店が閉まってる、何もやることのない長い週末を楽しむことを、自分で工夫し始める。その中で詩をもう一度読み始めるみたいなこともやつただけでも。で、その週末っていうのは非常に静かなんです。週末静かなでなくて、これは村毎に微妙に決まりは違うと思うんですけども、私たちが住んでいるところではちやんと条例がありまして、午後の一定の時間、例えば一時から三時くらいまでっていうのは本当に静かにする時間なんです。その時間はピアノの練習とかは、地下室だったら別なんだけど、普通の家だったら控えないっていうことになってるし、子供たちが元気で道で遊んでいると大体おじいさんかおばあさんがやつてきて、今は静かにする時間だから家の中で遊ばないなんて注意する、最初はなんておせっかいな住みにくい国だろうと思いましたが、そのうちそういうことにすこく積極的な意味があって、人間の暮らしに、精神性を深める、そういう決まりをたくさん持った国なんだなあっていうのが僕なりにまあそういうふうに思い始めて、だから「喋みの午後」っていうのは、その点だけとってみますともすこく日常的なドイツの一つの条例を日本語にしたら「喋みの午後」になったんですけど、それは私の中では詩をもう一回単なる活字とか表現のおもしろみという次元ではなくて、自分が生きていく上で絶対に無くてはならない糧として再発見した、そういう精神性の象徴として静かな沈黙の午後というタイトルで、それを小説の形、あるいは詩の形で表現しています。

この詩を書いていた時期に私の大好きな大詩人で先ほども「笑うバグ」の帯を書いて下さった谷川俊太郎さんという人が、一時詩をお書きにならなかつた時期があるんですね。少しは書いていたみたいなんだけれども。十年ぐらいの期間にわたってあまり発表しなかつた。お会いしたりしても、今はちよつと書かないようにしているんだみたいなおことをおっしゃっていて、で、最初僕はその何をか谷川さんっていう詩人が自分に

それこそ「喋」っていうのは「口」を「禁ずる」って書くんだけれども、詩を禁ずるように、罰するようにして書いていないのかなあと思って、自分は非常に熱心なファンだからまだ書かないのかな、残念だなあ思っていたんだけれども、ある時から、谷川さんは今日詩を書かないっていうのは只詩を書かないっていうことじゃなくて、詩というものに静けさを返してあげているのかなあっていうふうにも思い始めたんですね。詩っていうのは勿論言葉がないと表現出来ないし、読めないものなんだけど、言葉が表現しようと思ってる詩そのものは実はすこく静かな沈黙の彼方にあるもので、言葉っていうのは注意しないと詩を表現することも出来るけれども、言葉が傷つけることもある。で、谷川さんっていう人は、ずつと言葉で詩を書き続けてきた人がちよつと詩を休ませてあげているっていうか、詩を沈黙に戻してあげているんじゃないかなあというふうにして。それからしばらく経つと今度はもうこく積極的な、もしも今日谷川さんが詩を書かないとすればそれは沈黙っていう作品を書いているんじゃないかなあっていうふうにも思いました。

で、それはこの「喋みの午後」っていう小説書いたり、あるいはそういう題名の詩を書いている時、全然僕は関連づけて考えたことはなくて、只、詩集にして「喋みの午後」っていうタイトルに決めて、いよいよ本にしようっていう時に、何か訳もなくこの詩集のタイトル、題字を谷川さんの字で読みたいなって思って、ずうずうしくもお願ひしたら引き受けてくださって、で、谷川さんの字で本が出来上がって。それで今回この賞をいただいた、それでまた谷川さんが新しい詩集をお書きになったりして、それを読んでいて突然、あ、この「喋みの午後」の「喋み」は同時に谷川さんのあの沈黙の日々というかね、あの「喋み」にも連なってるんだなってことに気がきました。

だんだん時間が迫ってきたようで、さつき第三の告白の後で、第四は言わなかつたけれども、非常に切実な告白を第四でしたのは、小説を書こうとしたことがあつたけれども書けなかつたっていう、あれが第四の告白ですね。だんだん大詰めに迫ってきましたけれども。

ええと、最後にやはり「喋みの午後」から「口」の。これまた英語の言葉で、タイトルがね。なんだそれはと思われられるかもしれませんが、途中でちゃんとその説明が出てきますので、ご安心してお聞きください。

ハーバラから自転車を借りて隣町まで遊びに行った

この村からの距離は約六キロ

行きはなだらかな上り坂が続くけれど

その分帰りは気持ちがいいわよ

教えて貰った森の小道を見つけれなくて

急勾配のアスファルトの自動車道を

息切らして上った

教会の塔が見えてきてようやく野の畦道に入った

風に揺れる草のあいだを蛇が波のように這っていった

屋下ガリの町はしんとしていた

バス停の横の石段に少女がふたり座りこんで話していた

何軒目かのカフェがやっと開いていて

その裏庭でほくはただひとりビールを飲んだ

町を出るときも少女たちは同じ姿勢のまま座っていた

泊まっている村に戻って自転車を返しなが

ハーバラにどうだったと訊かれて、ほくは

Oh, it was bliss, it was just bliss!

と答えた。手もとの辞書によれば bliss (古詞)は

無上の(天上の)喜び、至福、天国、天国に在ること

青い空と太陽、雲と風、膚にあたる尖った草の穂

現世的といえはこれほど現世的な喜びもないのに

それが思いがけずあの世へと届く言葉の妙

あの果てしない下り坂を

僕を乗せた自転車が一気に駆け下りたとき

藪のなかにまた最初の家出をする前の

少年ランボーが蹲っていた

僕は自転車を跨ったまま目をつむって

陰の裏に木洩れ目をちらちらと瞬かせていたので

はつきりとそれが見えたのだ

It was bliss, just bliss.

日本語でならなんと言えばいいのかわ

極楽について語るのは野暮

黙って微笑んでだけいるのが粋なのか

気の利いた俳句でも捻って

夕空が一瞬夜明けのように白み

それからゆっくりと透き通っていった

空っぱの胃袋を抱えた垢と虱だらけのランボーが

真っ暗な野原を横切ってゆく

ベッドに横たわって目を閉じると、そこに

光が溢れた

以上をもちまして、つたない話だったけれども私の話を終わらせていただきます。

第五の告白、本当はしたかったんですけど、ちょうど時間切れになつてしまいましたので、またの機会に譲らせていただきます。どうもありがとうございました。

四元 康祐 (よつもと やすひろ)

1959(昭和34)年、大阪府生まれ。上智大学文学部英文学科卒業。

1986年より製菓会社の駐在員として米国に在住。1988年から1990年ペンシルベニア大学大学院に留学、経営学修士号(MBA)。

1991年、詩集『笑うバグ』(花神社)を出版。ビジネスの世界をテーマとした詩で話題を集める。

1994年、米国よりドイツへ転居。

2002年、詩集『世界中年会議』(思潮社)。過去10年に書き溜めたもので、アメリカ、子育て、中年シリーズの三部からなる構成。第5回駿河梅花文学大賞および第3回山本健吉文学賞を受賞。2003年、詩集『曙みの午後』出版(思潮社)。2004年、最新作『ゴールデンアワー』刊行。

現在、ミュンヘン郊外に在住。